かがアド STARS
KAGAWA UNIVERSITY

香川大学大学院 地域マネジメント研究科

地域ブランドへの挑戦

伝えることから始まる地産『知』消

KEYWORD

［にっぽんe物産市プロジェクト］ https://ebussan.jp/

地域の生産者にとって課題となっている新規市場の開拓を目的としたプロジェクト。経済産業省からの委託を受けて、中央エージェントと全国30地域の地方エージェントが地域の商品を選出し、消費者が質の高い地産品を知る「地産「知」消」市場を作り出そうとしている。

日本には魅力的な地域産品が沢山あります。ですが、残念なことにそれらは有名なもの以外あまり他の地域の消費者に知られていません。

いいものがあるのに販売網がなくて売れない、消費者は知らないから買えない…このような各地の生産者と消費者の間にある溝を埋める試みとして今年の夏に立ち上げられたのが、経済産業省の『にっぽんe物産市プロジェクト（地域商社的機能の検証）』です。このネット上のショッピングモール『e物産市』で各地の地域産品を紹介する全国30地域の代表（エージェント）の1つに、今年8月、香川大大学院地域マネジメント研究科を中心にした産官学の「ふるさとネットワーク事業推進協議会」の事業が採択されました。

プロジェクトに応募したのは、香川大学大学院地域マネジメント研究科の梅枝信利さん、田尾伸悟さん、兼田匡章さん、近原直樹さん、石田和也さんたち5人の社会人学生。

もともと5人の研究テーマは『地域の魅力を高め、ブランド化するためにはどうすればいいか』でした。

『よく地域格差と言われるが、香川は自然が豊かで治安はいいし人情もある。東京と同じ方向で競争する必要はなく、何よりここにある魅力をしっかりと伝えていくことが大切なのでは』

そう考えた5人が注目したのが、田尾さんの出身地でもある三豊市です。全国的にはまだまだ知られていない地域ですが、豊かな自然と人、誇れる地域産品がある町。その姿が全国から見た香川と重なったのだそう。

地域産品だけでなく、観光なども含めたこの町の情報を一元化してインターネットで発信する。質の高い商品の購入や体験をした消費者が、さらに別の消費者に情報を発信していく。この消費者と地域をダイナミックにつなぐ試みは、三豊市だけでなく香川、そして他の地域にも有効な仕組みとなるはず。そのための企画を進める中で出会ったのがe物産市だった、というわけです。

e物産市のサイトが11月から本格稼動した中で、卒業をひかえたメンバーはどのようにこのプロジェクトを続けるかということも議論しています。

「地域にお役立ちしたいという強い想いを持ちつつも、経済的に自立した仕組み作りが必要です。私たちは自分が所属している会社に戻りますが、会社も地域の一員。地域が一丸となって、それぞれどのような協力ができるかということを考えています」

梅枝さんが語る通り、香川県県産品振興室や地域物産に詳しいアドバイザーの村尾奈緒美さんなど、このプロジェクトには多くの人々が関わっています。気候風土やそこに暮らす人と企業、そこから生まれる特産品など、様々な輪から生まれた魅力的な情報が消費者のもとに届くとき、地域は5人が目指す『ブランド』への道を歩み始めます。

兼田 匡章
かねた　まさあき

梅枝 信利
うめがえ　のぶとし

田尾 伸悟
たお　しんご

近原 直樹
ちかはら　なおき

石田 和也
いしだ　かずや

救急車が来るまでに

KEYWORD

［一次救命措置］

特殊な器具を使わない心肺蘇生法のこと。心肺が停止した人の救命率を上げるために一般の人が行えるのは、すぐに救急車に通報し、人工呼吸や胸骨圧迫（心臓マッサージ）を行うことだが、AEDが使用できるようになったことで、さらに救命率が上がることが期待されている。

駅や自販機、公共の建物などの人の集まる場所で、AEDと書かれた箱を目にすることが増えてきました。これは事故や病気で一時的に心臓が止まった人に電気ショックを与え、正常な状態に戻すための装置。automated external defibrillatorの頭文字を取ってAEDと呼ばれるこの機械は、誰もが使用できる医療機器として、2004年から各地に設置されています。

…とはいえ、実際に人が目の前で倒れたときに、私たちは戸惑わずにちゃんとこれを使いこなせるのでしょうか？

「実際にAEDで助かった例は増えていますが、使ったのはほとんどが講習を受けた人なのだそうです」

そう教えてくれたのは、医学部5年生の浜谷英幸さん。他の大学で英文学を学び、卒業後に救急医療を志して香川大学の医学生となった浜谷さんは、先輩の代から続く救命措置の勉強会『学生ACLS勉強会』の代表として、現在約25人の医学部生とともに学生や職員、また一般の希望者向けに、このAEDの講習会を開いています。

それまで医師のみが使えたAEDを、なぜ一般の人も使えるようになったのか？　そこには、人の命に関わる重大な理由がありました。

「人が倒れた時、そばにいた人が救急車が到着するまでに何をしたかで救命率は変わるのです。病院に搬送されるまでの処置をBLS（ベーシック・ライフ・サポート：一次救命措置）と言いますが、この有無でその人が生きられるか、歩いて退院できるかが決まることもあります」

その重要性から講習を受けたいという人も多く、医師や消防署が使い方を指導していますが、非常に多忙な職業のため少人数でしっかり器機を触るような講座は時間的に難しい。学生がそんな負担をサポートできれば…という思いも、この活動のきっかけになったのだそう。そんなこともあって、学生の講座では学生インストラクターがそれぞれ3人の受講生を指導し、蘇生トレーニング用の人形とAEDを使って、胸骨圧迫（心臓マッサージ）や人工呼吸を学ぶ『実践』が重視されています。

「中学のバスケ部や市の青年団、子ども会など、声をかけていただいて色々な所に出かけました。参加した方に楽しかった、と言っていただけると嬉しいですし、気軽に質問ができるのも、学生ならではの利点かなと思っています」

医学部生の5年といえば、病院の実習や国家試験の勉強をする時期、さらに浜谷さんはより専門的な蘇生法の講習会の準備などもあり忙しい日々を送っています。そんな医学部生や医療現場の人たちがAEDに込めるのは、一人でも多くの人の命を救いたいという願い。

『救急車が来る前に、私たちに出来ることはあるだろうか？』と考えること。それが、いつか私たちの大事な人や、自分自身を救うかもしれません。

AEDの使い方について

使い方はとても簡単です。
1.電源を入れて
2.AEDから流れる音声に従う
ということを覚えておきましょう。

胸骨圧迫（心臓マッサージ）をしながら、AEDの電源を入れます。

AEDの音声に従って、パットを上半身に貼ります。

AEDが「離れてください」と言ったときは、胸骨圧迫を中断して離れます。

ショックの指示があった時は、誰も触れて無いことを確認してショックボタンを押します。

学生ACLS勉強会

1人でも多くの命を救うために
誰にでもできることがあります

代表 浜谷 英幸

PROFILE
はまや　ひでゆき
医学部5年